令和２年度　尚絅中学高等学校　学校評価
（評価対象年度：令和２年度）

自己評価総括

尚絅中学高等学校 学校評価

学校教育目標	
1	知と徳を兼ね備え、社会に貢献できる自立心豊かな近代女性の育成を目指す学校
2	尚絅で学んで良かったと生徒・卒業生・保護者が真に思う学校
3	地域で存在感のある学校

重点目標	
1	特色ある教育の確立
2	教育の質向上
3	生徒支援の確立
4	地域貢献の充実
5	学習意欲あふれる生徒の確保

自己評価総括のランクは、ＡＢＣの３段階とし、次頁以降の「自己評価」で２/３以上Ａ評価となった重点項目を「Ａ」ランク、２/３以上ＡまたはＢ評価を「Ｂ」ランク、それ以外を「Ｃ」ランクとしている。

重点目標に対する自己評価総括

1	特色ある教育の確立	B	今年度はコロナウイルス感染拡大防止のため様々な取り組みが変更や中止を余儀なくされたが、工夫をして進めることができたものもあった。グローバル教育については、コロナウイルス感染拡大防止のためオンラインやZoom等を利用し、できる範囲で実施ができた。ICT教育も「尚絅学園DX推進プロジェクト」が立ち上がり、具体的な施策計画を柱に準備を進め、今後もより一層の発展を全職員で進めたいと考えている。
2	教育の質向上	B	新学習指導要領に備え、教務部を中心にコース全体の特色等も見直しながらカリキュラム作成の検討を行っているところである。「主体的・対話的で深い学び」の授業の確立においては、教員一人ひとりの自己研鑽は勿論のこと、教科の本質を踏まえた改善が早急に求められると考えている。尚絅ならではの「教育の質」とは具体的に何であるかを考えながら取り組んでいく必要がある。
3	生徒支援の確立	A	課外活動においては、コロナウイルスの感染拡大防止から様々な活動が中止になり生徒の活躍の場が非常に少なくなった。休校明けの個人面談や全職員での情報共有など、環境の変化に対応できるよう生徒支援に力を入れた。また様々な問題を抱える生徒を、担任や学年部だけではなくカウンセラーのきめ細かいケアと環境保健部との連携により、早めの対処ができたと考えている。
4	地域貢献の充実	A	今年度はコロナウイルス感染防止のため、対外的な活動やイベント開催もなくなり活動が難しかった。しかし、地域貢献のために生徒会を中心として全校生徒へ呼びかけたフードバンク寄付や被災地へのタオル寄付など、限られた範囲の中で何ができるのかを学ぶきっかけになった。今後も感染症対策が続くと予想される中、状況を踏まえた取り組みを検討しなければならないと考えている。
5	学習意欲あふれる生徒の確保	B	学習意欲あふれる生徒の確保については、生徒数の確保だけではなく私学が最も大事にしている「建学の精神」をいかに生徒に伝え、社会に送り出すかという大きな使命があると考えている。その上で、本校を生徒・保護者に選んでもらえる学校にしていく内部改革とアウトプットをどのようにしていくかの具体策を練っていく必要があり、今後の大きな課題である。

自己評価

尚絅中学高等学校 学校評価

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
教育の質向上	人間教育プログラムの充実	外部人材・事業の活用	外部の専門家の活用により授業以外の専門的知識を深める。	A	感染症対策を講じながら各部の計画に沿って講話、研修等を実施した。
		グローバル教育の充実	留学生との交流や外部団体との連携により国際感覚を養う。	A	受け入れ国等の感染状況の把握や入国後の隔離期間を経て、留学生３名の受け入れを行った。
		礼法教育の確立	学校の諸活動を通して学んだ礼儀作法を日常生活に役立てる。	B	高校１年次より段階的にマナー検定を受検し、２学年で上級に全員合格を成し遂げた。
		諸活動のPDCAサイクルの確立	教育の柱となる各部の活動を集約し、計画を策定する。	B	感染予防を講じながら年間計画に則り実施した。
	魅力ある授業の確立	教科指導力の向上	教科指導力向上の為、研修会参加や外部講師の助言を仰ぐ。	B	他校視察やオンライン研修等を行い、情報共有を図りながら本校での取り組みについて検討した。
		授業改善の確立	生徒へ魅力ある授業を提供するために研究授業等の充実を図る。	B	外部講師招聘での研究授業は中止したが、校内での研究授業や授業見学を実施し自己研鑽に役立てた。
		ＩＣＴ教育の充実	ＩＣＴの利活用により生徒に様々な情報を提供する。	B	休校期間中の連絡や課題の配信及び個別添削等にClaaiを活用した。
	進路指導の充実	進路指導力の向上	進路指導部を中心に入試改革の研究を行い、指導力向上を目指す。	B	外部研修会資料を各部・学年で共有し、入試改革についての情報共有・研究に努めた。
		進路研修会の充実	外部研修会参加、ＡＬ、新入試制度の対策を行う。	A	オンラインでの研修会に各教職員が参加し、指導力向上や情報収集に努めた。
		進路実績の向上	進路実績向上の為、課外やゼミの充実を図る。	B	模試の結果分析を進路指導部・学年を中心に行い、面談等で有効活用した。
		課外授業の確立	各コースの進路希望に応じた内容の充実に努める。	B	習熟度別の課外や進路別特別時間割を組んで実施した。
		個別指導の強化	各種検定試験合格、小論文指導や個人指導を実施する。	A	検定試験対策や小論文指導、その他入試対策などの個別指導を実施した。
		進路指導体制の研究と実践	講演会や進路指導情報誌の発行、また、多くの情報を提供する。	B	コロナウイルス感染拡大により研修会が減少したが、可能な範囲で情報提供を行った。
	各コースの特色つくり	各コースの教育内容の研究と実践	コースの特色を活かし、より効果の高い編成を検討する。	B	コース別に取り組んだが、多様化される入試に向けて今後も検討を重ねていく。
		特色あるカリキュラム・選抜クラスの充実	最新の情報収集を行い、カリキュラム委員会で検討、策定する。	B	カリキュラム検討委員会や教科主任会などでの検討を重ねた。
		各種検定試験の充実	各種検定試験を推進し、取得資格を活かした進路実現を奨励する。	A	各教科や委員会を中心に計画的に実施し、成果が見られた。
	中高大連携の強化	内部進学の達成	内部進学のメリットやより多くの情報を提供する。	A	進路指導部を中心にして内部進学のメリット等の情報提供を生徒・保護者へ行った。
		高大進学連絡会の充実	高大相互の情報を共有し、内部進学者の進路達成の一助とする。	B	各学科の担当者との打ち合わせ会を行い、双方の情報の共有を行った。
		中高大連携事業・授業の確立	総合学園としての特色を活かし生徒の進路志望の実現を図る。	B	学部・学科説明や、大学の先生の授業等も計画的に行った。
		広報活動の連携強化	中高だけでなく大学との連携による一貫教育の良さを強化する。	B	中高入試アドバイザーと入試センターとの情報交換を通して、広報活動に活かした。
教育の質向上	主体的・対話的で深い学びの授業の確立	教育の特質を活かした取り組みの研究と実践	教科会の充実を図り、ＡＬ、Classi等を利用した取り組みを実践する。	B	オンライン等での研修会参加や授業見学を行い、教科会で検討した。
		言語能力の確実な育成	プレゼンやディベート等を通して言語能力の育成をする。	A	一貫コースや部活動で実施し、成果を得た。
		教科の横断的な学習の充実	他教科とのコラボを図りながらより広い知識を習得する。	B	全職員による授業研究を行い、指導力向上に役立てた。
	カリキュラム・マネジメントの研究と取り組み	社会に開かれた教育課程の研究	新学習指導要領に則り、地域をフィールドとした研究を推進する。	B	2022年度実施に向けて、継続して審議する。
		理数教育の充実	論理的に問題解決を図る能力を育成する。	B	県の研修会に参加して検討をしたが、次年度も継続する。
		伝統や文化に関する教育の充実	伝統文化の知識・技術及び考え方を学び必要な資質の育成を行う。	A	授業を通して必要な知識・技術等を学んだ。
		キャリア教育の充実	学校と社会の接続を考え、身につける能力・資質を育成する。	A	ベネッセ教材等を使い進路研究を行った。

自己評価

尚絅中学高等学校 学校評価

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
生徒支援の確立	奨学生制度・表彰制度等の活用	制度を活用した生徒の支援	学力・特技に秀でた生徒を支援する。	A	広報部、部活動顧問を中心に訪問活動を継続し優秀な生徒の獲得に努める。
	課外活動の充実	生徒会活動の充実	生徒会執行部を中心に学校行事等の企画・運営を推進する。	B	文化祭・体育祭は中止となったが、代替行事として学年毎の行事を生徒会主体で行った。
		部活動の充実	部活動を通し、心身の調和がとれた人間教育の一環を目指す。	A	様々な大会が中止となったが、代替え大会等で運動部・文化部共に優秀な成績を収めた。
		ボランティア活動の強化	活動を通して奉仕の精神を育成し、地域貢献に資する。	A	中止となったボランティアも多かったが、フードバンク寄付、被災地へのタオル寄付等を行った。
		リーダー養成の活性化	研修を重ねながら、リーダーとしての自覚を促し養成を図る。	B	定例会、委員会でリーダーが主体的に取り組み、校内外の活動の充実に努めた。
	教育相談の充実	生徒支援体制の確立	生徒理解を深めるため、情報共有を充実させる。	A	環境保健部を中心に全職員対象の生徒情報共有を行い、職員間の連携を深めた。
		カウンセリングの充実	スクールカウンセラーを中心に問題の早期解決を図る。	A	休校明けに全校で個人面談を実施し、各担当者を中心に連絡を密にして早期対応に努めた。
		外部組織・人的支援の活用	県の支援事業等を活用しながら問題解決に当たる。	A	特別支援相談員やＳＳＷを活用した支援を行い、次年度も継続する。
	育友会・後援会・同窓会との連携の確立	学校行事での連携強化	学校との連携を図り、学校行事の一層の充実に努める。	B	文化祭・体育祭・尚絅コンサート・金峰山登山は、コロナウイルス感染拡大の為に中止した。
		保護者会の充実	学校と保護者の協働による教育体制を充実させる。	A	保護者の密を避けるため、学年毎に実施時間を分けるなど実施場所や内容を工夫して実施した。
		同窓会・後援会総会等への出席の確立	学校と連携を推進し、協働体制を確立する。	—	総会及び各地区の同窓会、懇親会が中止となったが、今後も連携しながら会員の掘り起こしに努める。
地域貢献の充実	地域活動の支援	部活動等の合同練習会開催の確立	他校や他団体との繋がりを持ち、生徒の活動の場を広げる。	B	感染予防の為に、状況を見ながら合同練習会を一部再開した。
		ボランティア活動の充実	地域に密着した活動を通して貢献する姿勢を養う。	A	九品寺校地周辺の清掃活動や産業道路沿いの花壇への植栽を実施した。
	学校主催事業の充実	本校主催の各種大会の開催	部活動の活性化と各種大会を通して広報活動の一助とする。	A	感染対策を講じながら可能な限り、合同練習や他団体への会場の提供を行った。
学習意欲あふれる生徒の確保	広報活動の充実	活動内容の再検討	より効果的な活動計画を策定し実施する。	B	学校説明を中心としたオープンスクールに変更し、説明会の実施回数を増やした。
		広報部員のスキルアップ	外部講師による研修を行い、実践に役立てる。	A	県外の学校から講師を招き研修会を行い、本校の教育活動に役立てた。
		ホームページの充実	迅速に内容をアップし広報活動の一助とする。	B	部活動や行事のアップは迅速に行ったが、ホームページ内容等のリニューアルが必要である。
		全職員対象研修会の確立	マナーなどの指導を徹底し職員の広報力の向上を目指す。	B	入試アドバイザーと連携しながら学校訪問や説明方法を全職員に徹底し、訪問活動を実施した。
		広報部の組織改革の可視化	計画の構築、実践攻略等を中心に全職員の動きを可視化する。	B	学校全体の行事計画に則り、計画的に取り組んだ。
		入試内容の検討	受験生獲得のため問題内容の検討を充実させる。	A	公立高校入試問題の腕試しとしての受験ができるように工夫し、定着しつつある。
		小学校・中学校・学習塾・個別訪問活動の充実	広報の活動区域を広げ積極的に訪問活動を行う。	A	感染状況に応じた訪問活動を再構築し、入試アドバイザーとの連携を取りながら訪問活動を重ねる。
	入試制度の改革と訪問の強化	制度の周知徹底	入試アドバイザーと共に、小中学校、塾で丁寧な説明を行う。	B	小学生対象に様々な広報活動を行ったが生徒獲得には至らず、改善が早急に必要である。
		特待生制度を活用した学力・特技に優れた生徒獲得の確立	学力・特技に秀でた生徒を獲得し、本校生徒の牽引者を育成する。	B	感染予防対策を講じながら、各説明会や学校訪問を入試アドバイザーの協力のもと行った。
		指導者との連携の強化	対外試合や習い事教室等の場を利用して情報を得る。	A	大会・試合が中止の中、各指導者と連携をとりながら生徒獲得に繋げた。
		入試制度の検討と充実	特待生制度の見直しを行い生徒獲得に繋がるように取り組む。	B	特技特待Ｂの枠の拡大など一部で見直しを行ったが、今後も特待生制度の見直しを継続する。
	小・中学生対象広報活動の強化	本校主催の大会等の充実	地域の諸活動の支援を行うと共に部活動の活性化を図る。	B	英語暗唱大会はオンラインでの発表の場を提供し、好評を得た。
		入試改革の達成	中学入試を中心に入試科目を検討し、本校の特色を打ち出す。	B	中学入試に英語を取り入れて２年目となり、本校の特色の一つとして今後も広報に力を入れる。
		小学校・英語塾等の訪問強化	本校の英語教育の成果や一貫教育の利点を広める。	B	学校説明会などを利用して一貫コースや英語教育の特色をＰＲした。

関係者評価

尚絅中学高等学校 学校評価

学校生活に関して「生徒」「保護者」にアンケートを実施しました。

○：よくあてはまる・ややあてはまる　　●：あまりあてはまらない・全くあてはまらない

生徒による評価

		○	●
1	**尚絅に入学して良かった**	**○ 82%**	**● 8%**
2	友人と仲良く楽しい学校生活を送っている	○ 94%	● 1%
3	学力向上を目指して積極的に取り組んでいる	○ 87%	● 6%
4	クラスマッチ・体育祭・文化祭などの行事が充実している	○ —%	● —%
5	しつけ・礼法教育に積極的に取り組んでいる	○ 91%	● 3%
6	部活動が盛んである	○ 92%	● 2%
7	施設・設備が充実している	○ 95%	● 2%
8	掃除など環境美化に取り組んでいる	○ 95%	● 2%
9	先生や来校者への挨拶や礼儀作法の実践を心がけている	○ 92%	● 1%
10	新型コロナウイルス感染症に対して適切な対応を行っている	○ 87%	● 7%

生徒による評価の総括

どの項目においても昨年度に比べて評価が上がっているのは、コロナウイルス感染拡大防止のため、長期間の休校が余儀なくされたことが影響していると考える。改めて学校の存在意義や当たり前にできる日常生活のありがたさ、医療従事者を初め周囲の人々への感謝など今まで気が付かなかったことをじっくり考えた結果と考えている。今年度は長期休校後も学校生活に多くの制限がかかり、部活動、体育祭や文化祭、修学旅行も中止となり、充実した学校生活が送れたとは言えないが、生徒たちは②の結果のように楽しく学校生活を送っている。次年度は②の項目だけではなく総合的に考えて①の項目がアップするような取り組みに努力していきたい。また、今年度は新たにコロナウイルス感染症に関する項目⑩を設けた。文科省を初め、保健所、教育委員会の指針を参考に取り組んだが、今後も状況を見極めながら迅速に対処していきたい。更に、**今年度からアンケートの中に記述項目を設け生徒の具体的な声を拾うようにした。**全職員に「他人事」としてではなく「自分事」として認識してもらうため、職員会議を開き、内容把握を行った。今後、職員一同、襟を正して改善に向けた努力が必要であると考えている。

保護者による評価

		○	●
1	尚絅に入学させて良かったと思う	○ 90%	● 7%
2	友人と仲良く楽しい学校生活をすごしていると思う	○ 90%	● 8%
3	**学力向上を目指して積極的に取り組んでいる**	**○ 72%**	**● 25%**
4	クラスマッチ・体育祭・文化祭などの行事が充実している	○ 79%	● 14%
5	しつけ・礼法教育に積極的に取り組んでいる	○ 88%	● 5%
6	部活動が盛んである	○ 85%	● 5%
7	**進路指導が適切に行われている**	**○ 77%**	**● 14%**
8	施設・設備が充実している	○ 97%	● 2%
9	掃除など環境美化に取り組んでいる	○ 82%	● 6%
10	新型コロナウイルス感染症に対して適切な対応を行っている	○ 82%	● 6%

保護者による評価の総括

生徒の評価とは異なり、**③⑦の学力、進路指導に対する保護者の期待度を満足させることができていない。**本来なら、一番教師が得意とする分野であるが、なかなか指導力向上に至っていない結果だと反省している。生徒の進路決定に関わる最重要課題と考え、**教職員の学力測定テストの導入、ICTを取り入れた研究授業、進路指導研修などを重ね今後の結果に結び付けたい。**また、⑩に関しては様々な保護者の考え方がある中、本来なら100%の安心感が求められるべきところであるが、全ての保護者に理解していただくことの難しさを感じている。コロナウイルス感染症については、不透明なところもあるが生徒が安心して通える学校として、全職員で情報を共有しながら、保護者への情報発信の方法を考えていきたい。

学校評価委員（保護者の代表・同窓生の代表）に評価をお願いしました。

- 礼法教育に関しては卒業式等の立振舞の素晴らしさには卒業生として誇りを持っている。また、最近は、声を出して挨拶する生徒が増えたように感じる。しかし、一方で**礼法教育として特別なことをするわけではなく、学校に足を踏み入れた時にきちんとした雰囲気があるのが本当の礼法ではないか、と感じる時がある。**先生方が襟を正して対応していただくことが、一番効果がある。未だに生徒を呼び捨てにしたり、生徒の椅子を足で動かす先生がいる。教育には人的環境が一番であり、子どもは敏感に感じているし、よく見ている。**学校を選ぶ時も点数の違いだけではなく、周りからも一目置かれる学校になってほしい。**意識改革は大人がやらなければ変わらない。子ども思いの熱心な先生がいるのに対して、数名の先生の意識が変われば学校は変わるのにもったいないと感じる。

- 尚絅大学、短期大学部への内部進学は魅力である。もっとアピールしたほうが良い。入学金免除は非常にメリットであり、これを知らない保護者もいる。コロナ禍での説明会等は難しさもあるが、担任はきちんと伝えるべきであり、もっとアピールすべきである。

- 大学レストランのパーテーションが白だったので気になったが、至急変えてくれるということで安心した。レストランは大学生も中学生、高校生も利用するのでより一層気を付けないといけないと感じた。

- 子どもが今年の３月に卒業したが、尚絅を選んでよかったと感じている。緊急連絡なども朝５時にはもらっている。また、通常の連絡もこまめにしていただき感謝している。このようなところが保護者の気持ちをよく理解してくれていると感じるところであり、他校とは違うと思うところである。

総合評価・課題等

尚絅中学高等学校 学校評価

■総合評価

① 特色ある教育の確立

本校の特色ある教育を確立するための一つの取り組みとして、専門家を招いて講演会や研修会を始め、グローバル教育を推進してきたが、今年度はコロナウィルス感染拡大防止のため中止を余儀なくされた。しかし、オンラインやZoom等を利用し、できる範囲で実施ができたと考えている。特に、他校が実施していない留学生の受け入れは、時期を考慮しながら、また、十分な対策を講じて３名の留学生を受け入れ在校生にとっても良い経験となっている。コロナウィルス感染拡大防止の観点から長期にわたる休校となった為に、なかなか先に進まなかったICT教育も「尚絅学園DX推進プロジェクト」が立ち上がり、具体的な施策計画を柱に、教科、各コースや部署で推進できる準備が整った。**本校の一番の特色である内部進学も進路指導部を中心に、高校３年部は勿論、他学年においても大学・短大の具体的な情報を提供できるようになった。**

② 教育の質向上

２０２２年実施の新学習指導要領に備え、教務部を中心にコース全体の特色等も見直しながらカリキュラム作成の検討を行ってきた。中学・高校においては、教科専門性における教員能力が問われることは当然のことであり、教育の質の根底となる。しかし、評価アンケートにも表れているように、教育の質に深くかかわる学力向上において、十分な指導力を発揮しているとは考えられない。特に、従来の講義型授業しかできない教員も少なくない。「主体的・対話的で深い学び」の授業の確立においては、教員一人ひとりの自己研鑽は勿論のこと、教科の本質を踏まえた改善が早急に求められると考えている。今よりも、より質の高い授業を提供するためには、少なくとも専門教科の知識や指導力向上が望まれる。そのために次年度から導入する「教員能力測定テスト」を皮切りに、教員の能力開発のための取り組みを考えているが、「教育の質」という大きな枠組みの中で、教科指導力は１つに過ぎない。**尚絅ならではの「教育の質」とは具体的に何であるかを考えながら取り組んでいく必要がある。**

③ 生徒支援の確立

課外活動の充実においては、生徒会活動、部活動、ボランテイア活動などがコロナウィルスの感染拡大防止の観点からほとんどの活動が中止になり、生徒の活躍の場が非常に少なくなった。しかし、小規模であっても開催できた大会やコンクール等には積極的に参加して九州大会、全国大会出場などの結果を残すことができた。また、様々な家庭環境や問題を抱える生徒が入学してくる中で、担任や学年部だけでは解決できない事案が多くなったが、カウンセラーのきめ細かいケアと環境保健部との連携により早めの対処ができている。特に、今年度はコロナウィルス感染症による精神的なケアが生徒だけではなく保護者においても必要であった。特定の生徒に限らず、誰でも教育相談が受けられる体制が整い始めた。

④ 地域貢献の充実

昨年度、対外的な部活動の活躍や地域のイベントへのボランテイア活動等、地域貢献への意識向上は非常に高まったが、今年度は対外的な活動やイベント開催もなくなり活動が難しかった。また、本校主催の大会だけでなく、アリーナを開放しての塾や部活動の対外試合等が実施できないことが多かった。しかし、今後もコロナウィルス感染症も続くことが予想される中、状況を踏まえた取り組みを検討しなければならないと考えている。

⑤ 学習意欲あふれる生徒の確保

コロナ禍での広報活動の難しさはあるが、受験生にどのようにしたら本校に足を踏み入れてもらえるか、オープンスクールだけではなくネットを利用した方法等広報部だけでなく、コースごとの広報活動も必要になってきている。学習意欲あふれる生徒の確保は、生徒数の確保だけが目的ではなく、**私学が最も大事にしている「建学の精神」をいかに生徒に伝え、社会に送り出すかという大きな使命を持っているということを教師集団が理解することが急務だと考えている。**その上で、部活動生徒を主体とした特技特待生や本校を第一希望で入学してくる専願生の数の確保は、在校生や保護者の声に謙虚に耳を傾け、正すべきところを正し、本校を選んでもらえる学校にしていく内部改革とアウトプットをどのようにしていくかという広報部の在り方を柱として具体策を練っていく必要があると考えている。

■令和３年度への課題・改善方法

① 昨年度からのコロナウィルス感染拡大により長期間の休校や様々な学校行事、部活動中止等を通して、学校の存在意義、進路選択の変化など、この流行は生徒の将来を大きく変えるきっかけとなったと感じている。また、それに伴う学校教育の在り方や授業改革、ICT教育の充実を図ることなど多くの課題が一度に押し寄せている。様々な社会情勢や教育環境の変化に遅れないように学校改革を早急に行っていかなければならないことは当然だが、これについてこれない教員もいることは事実である。**ひとつ一つのことに丁寧に向き合い、なお且つ、新しい発想で新しい取り組みを学年、コース、教科、各部署で地道に取り組んでいきたい。**

② 「本校の弱み・強み」のリサーチ、学校評価アンケートなどを参考に、次年度に向けて策を講じながら在校生の満足度をどのようにしたら上げることができるか、具体的な方策を企画運営会議、広報部会、中学部等でも検討し、次年度に繋げていけるような取り組みを考え、全職員におろしていきたいと考えている。また、これらの問題は今後の本校の生き残りにもかかってくる重要な問題であることを共有する必要があると考えている。「尚絅に入学して良かった」と思う生徒が８割９割になればよいという考え方ではなく、当然100%にすべきであるという認識を全員で確認しながら何をすべきか全職員で実施していくことが一番の課題となる。